故事成語

教材のねらい

1 選定の理由

「故事成語」の三編は、現在も使われている成語の由来となった故事を選んだ。ある程度まとまった文章を通して、「訓読の世界」で学んだ基礎知識（語順・訓点の付け方・助字の用法）を確認し、漢文訓読に慣れるとともに、内容的にも故事となった寓話のもつ比喩性を読み取らせるなど、一歩深めて考えさせることをねらいとした。教材の配置は、「蛇足」は「レ点」と「一・二点」、「朝三暮四」は「一・二点」と「レ点」の組み合わせ、「断腸」では「上・下点」と「熟語に戻る場合」の返り点というふうに返り点の付け方をもとにしてある。

三編とも現在の日常生活に類推して当てはめることのできる話であったり、あるいは言葉として実際に使われるものであったりするので、そのような方面からもアプローチし、教材との関連に気づかせるという学習をさせたいところである。「漢文の窓②」の三作品は、故事成語が現在も多様な文章に使用されている一例として示した。

2 指導のねらい

「故事成語」では次のような点を中心に指導したい。

(1) 音読や、書き下し文を書く作業を通して漢文の訓読に慣れるとともに、ある程度まとまった文章の趣旨をつかむ。

(2) 再読文字や置き字の用法などに習熟し、初めての文章も独力で読む力をつける。

(3) 故事としての意味を考え、それが現在どのように用いられているかについて確かめる。できれば時代背景なども含めて文章の背後に流れるものの考え方などにも迫っていきたい。

(4) 漢和辞典を活用し、漢字一字には多くの意味があり、文脈によって判断する必要があることを認識する。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4　評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	蛇足（漢文の窓 1）	朝三暮四	断腸	単元の言語活動 2（漢文の窓 2）
〔知識・技能〕					
(1)ア	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。				○
(1)ウ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	○	○		
(1)ウ	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。			○	○
(1)エ	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。	○	○	○	
(2)ア	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。				○
(2)イ	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	○		○	
(2)ウ	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解している。	○	○	○	○
(2)エ	時間の経過による言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。			○	○
(2)エ	時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。		○		
〔思考・判断・表現〕					
B(1)ア	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。			○	
B(1)イ	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	○		○	
	作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。		○		

B(1)オ 「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。				○	○
〔主体的に学習に取り組む態度〕					
進んで短い漢文を読み、文章の内容をその叙述に即して的確に読み取り、故事成語の由来や意味と、現代の言葉とのつながり理解し、学習課題に沿って、身近な「蛇足」の例を考えようとしている。	○				
進んで短い漢文を読み、文章の内容をその叙述に即して的確に読み取り、故事成語の由来や意味と、現代の言葉とのつながりを理解し、学習課題に沿って、身近な「朝三暮四」の例を考えようとしている。		○			
進んで短い漢文を読み、文章の内容をその叙述に即して的確に読み取り、故事成語の由来や意味と、現代の言葉とのつながりを理解し、学習課題に沿って、「断腸の思い」という表現を用いて小話を作ろうとしている。			○		
進んで故事成語の由来や意味と、現代の言葉とのつながりを理解し、文章の内容をその叙述に即して的確に読み取り、今までの学習を生かして、故事成語を「五・七・五」で表現しようとしている。					○

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

蛇足：身近な「蛇足」の例を考える。【〔思・判・表〕B(2)イ】

朝三暮四：身近な「朝三暮四」の例を考える。【〔思・判・表〕B(2)イ】

断腸：「断腸の思い」という表現を用いて小話を作る。【〔思・判・表〕B(2)イ】

単元の言語活動2：故事成語を「五・七・五」で表現する。【〔思・判・表〕B(2)イ】

指導計画案

指導上の重点目標	学習活動と指導上の留意点	
1　故事成語を理解させ、興味を喚起させる。 【蛇足】 1　漢文の口調に慣れさせる。 2　語句の意味、用法に注意し、本文の内容を理解させる。 3　「蛇足」という故事成語の意味と由来を理解させる。	導入	❶　中学校で学んだ故事成語や、生徒が知っている故事成語を挙げる。資料集を参照してもよい。
	展開	❶　指導者の範読を聞き、訓点に従って本文を目で追う。 範読・斉読・指名読み・ペア読みなどを適宜組み合わせ、繰り返し練習させる。 ❷　書き下し文をノートに書く。知技〔「学習のポイント」1〕 書き下す部分を指定したり、生徒同士で相談させたりしてもよい。P一三二「書き下し文のまとめ」を参照させる。 机間巡視して生徒が躓いている点を確認する。 ❸　脚注を参照して現代語訳し、疑問点を指摘する。 現代語訳する部分を指定してもよい。また訳文を配るなどしてもよい。 ❹　再読文字の用法を確認する。 再読する理由を再確認させる。
	まとめ	❶　「蛇足」は、どのような失敗談なのか説明する。思判表〔「学習のポイント」2〕 漢文の窓①を参照し、寓話の特徴について理解を深めさせる。 ❷　「蛇足」の意味を調べ、身近な「蛇足」の例を探す。知技　主態〔「言葉と表現」1、「言語活動」1〕 漢文の窓②「お米の話」を参照させてもよい。 ○　テストを実施する。 ○　語句・句形問題を実施する。

【朝三暮四】 漢文の口調に慣れさせる。 語句の意味、用法に注意し、本文の内容を理解させる。 「朝三暮四」という故事成語の意味と由来を理解させる。	展開	❶返り点に従い、本文を自分で繰り返し音読する。 読む順番が分からない場合は、生徒同士で相談させてもよい。 ❷書き下し文をノートに書く。知技 書き下す部分を指定したり、生徒同士で相談させたりしてもよい。P一二三「書き下し文のまとめ」を参照させる。机間巡視して生徒が躓いている点を確認する。 ❸脚注を参照して現代語訳し、疑問点を指摘する。 現代語訳する部分を指定してもよい。また訳文を配るなどしてもよい。 再読文字の用法を確認する。知技 ❹再読の理由を再確認させる。
	まとめ	❶「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことをまとめる。 知技　思判表　〔「学習のポイント」１〕 「狙公」と「衆狙」のそれぞれに主眼を置いた場合で寓話の解釈が変わってくることに気づかせる。二つの漢数字が用いられている四字熟語を探す。〔「言葉と表現」１〕 ❷資料集・漢和辞典で調べさせる。 ❸「朝三暮四」の意味を調べる。知技〔「言葉と表現」２〕 漢和辞典・国語辞典で調べさせる。漢文の窓②の新聞記事を参照してもよい。 ❹❶を踏まえて身近な例を探す。主態〔「言語活動」１〕知技 寓話の登場人物の特徴を理解し、身近にある似た場面を想起させることで理解を深めるための問い。 ○テストを実施する。 ○語句・句形問題を実施する

【断腸】 漢文の口調に慣れさせる。 語句の意味、用法に注意し、本文の内容を理解させる。 「断腸」という故事成語の意味と由来を理解させる。	1 2 3	
展開		**まとめ**
❶返り点に従い、本文を自分で繰り返し音読する。 読む順番が分からない場合は、生徒同士で相談させてもよい。 ❷書き下し文をノートに書く。知技 書き下す部分を指定したり、生徒同士で相談させたりしてもよい。P一二三「書き下し文のまとめ」を参照させる。 机間巡視して生徒が躓いている点を確認する。 ❸脚注を参照して本文を現代語訳し、疑問点を指摘する。 現代語訳する部分を指定してもよい。また訳文を配るなどしてもよい。 ❹桓公が、猨子を得た者を「黜」けた理由を説明する。知技 思判表〔「学習のポイント」1	❶「断腸」の意味を調べる。知技〔「言葉と表現」1〕 漢和辞典・国語辞典で調べさせる。漢文の窓②の小説を参照してもよい。 ❷故事成語の元となった話を調べる。知技〔「言葉と表現」2〕 漢和辞典・国語事典・資料集・インターネットで調べさせる。 ❸「断腸の思い」という表現を用いて小話を作る。知技 主態〔「言語活動」1〕 漢文の窓②『三国志』を読み、参考としてもよい。 ○テストを実施する。 ○語句・句形問題を実施する。

【単元の言語活動2　故事成語を「五・七・五」で表現する】

1　辞書やインターネットで知りたいことを調べられるようにさせる。
2　故事成語の元となった話の要点を理解させる。
3　故事成語の状況を身近なエピソードに置き換える。

導入	**展開**	**まとめと発展**
❶	❶　❷　❸	❶　○
ワークシートと振り返りシートを配布する。 活動の目的を説明する。	故事成語を一つ選び、意味と由来を調べる。 知技 ①漢和辞典や故事成語辞典、資料集を参照し、故事成語を一つ選ぶ。 ②意味・もととなった話（エピソード）を辞典やインターネット、資料集で調べる。 「五・七・五」を作る。 ①もととなった話の特徴的な点を見つける。 ②意味・状況・由来が伝わる「五・七・五」を心がける。 調べたことをまとめる。 知技 ①選んだ故事成語とその意味、もととなったエピソード、❷で作成した「五・七・五」を紙一枚にまとめる。	グループを作り、相互評価を行う。 思判表 主態 お互いの「五・七・五」のよかった点を相手に伝える。また、改善するとよい点があればそれも伝える。 振り返りシートに記入させる。

蛇足

作者

劉向

前七七年頃～前六年。前漢最大の儒者。子の劉歆（りゅうきん）と共に宮中の図書を整理校訂して解題を加え、これが後に「漢書芸文志」の基礎になった。漢王室の親戚としての使命感から政治のことにも関心を失わず、たびたび上奏して当時専権を振るっていた宦官や外戚を弾劾し、獄に下されたこともある。著書に「新序」「列女伝」「説苑」などがある。

出典

戦国策

三十三巻。早くから錯乱していたのを劉向が校訂して三十三巻としたと伝えられる。周の元王から秦始皇二十五（前二二二）年まで二百四十余年間の戦国時代の遊説家の権謀術数およそ四百八十章を、国別（東周・西周・秦・斉・楚・趙・魏・韓・燕・宋・衛・中山）に収録したもの。説客たちが諸侯に進言したり、他国に使節として派遣されたりしたときの命を賭けた弁舌が中心で、その中に多くの寓話がちりばめられており、議論文としても出色のものである。なお「戦国時代」の名称は、この「戦国策」に書かれている時代との意味である。本文は「斉策上」からとった。

本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　戦国策　上」（林秀一著）によった。

参考文献

❊ **教師用**

▽**注釈書**

「戦国策」（中国古典文学大系）常石茂　平凡社　昭四十七
「戦国策」（全釈漢文大系）近藤光男　集英社　昭五十
「戦国策」（新釈漢文大系）林秀一　明治書院　昭五十二

❊ **生徒用**

「戦国策」（新書漢文大系）林秀一　明治書院　平八
「故事成語で中国を読む」（ちくま文庫）多久弘一　平二十

要旨

もともとあり得ない蛇の足を絵に描いたために賭け事に負けてしまった男の話を通して、物事の余計な付け足しはしないほうがいいとの教訓を述べたもの。

構成

全文一段落。

訓読と現代語訳

①楚に祠る者有り。②其の舎人に巵酒を賜ふ。③舎人相謂ひて曰はく、「数人にて之を飲まば足らず、一人にて之を飲まば余り有り。請ふ地に画きて蛇を為り、先づ成る者酒を飲まん。」と。④一人の蛇先づ成る。⑤酒を引きて且に飲まんとす。⑥乃ち左手もて巵を持ち、右手もて蛇を画きて曰はく、「吾能く之が足を為る。」と。⑦未だ成らざるに、一人の蛇成る。⑧其の巵を奪ひて曰はく、「蛇固より足無し。子安くんぞ能く之が足を為らんや。」と。⑨遂に其の酒を飲む。⑩蛇の足を為る者、終に其の酒を亡へり。

①楚の国に司祭者がいた。②（あるとき司祭者は）その召し使いたちに大杯に満たされた酒をふるまった。③召し使いたちは相談し合って言うには、「この酒は何人もで飲めば足りないが、一人で飲むなら余るほどある。地面に蛇の絵を描いて、真っ先に描きあげた者がこの酒を飲むことにしよう。」と。④その中の一人が真っ先に蛇を描きあげた。⑤酒を引き寄せて飲もうとした。⑥そして左手で杯を持ち、右手で蛇を描きながら言うには、「俺はこいつに足だって描けるぞ。」と。⑦（真っ先に蛇の足を描き上げた召し使いがその足を）まだ描き終わらないうちに、もう一人が描いていた蛇が出来上がった。⑧（真っ先に蛇の足を描き上げた召し使いが持っていた）杯を奪い取って言うには、「蛇にはもともと足なんかない。あなたはどうして蛇の足を描けるのか（いや描けるはずがない）。」と。⑨そのままその酒を飲んでしまった。⑩蛇の足を描こうとした者は、結局（一度手にした）酒を（とられて）失ってしまった。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 中学校で学んだ故事成語や、生徒が知っている故事成語を挙げる。資料集を参照してもよい。

❶ 中学校で学習した故事成語を発表させ、共有する。中学校の教科書を基にしたプリントや、資料集を活用し、知っている故事成語を整理、確認させるとよい。

発展

学習活動のポイント

❶ 指導者の範読を聞き、訓点に従って本文を目で追う。

❷ 書き下し文をノートに書く。知技(2)ウ

〔「学習のポイント」1〕

❸ 脚注を参照して現代語訳し、疑問点を指摘する。

❹ 再読文字の用法を確認する。知技(2)ウ

❶「訓読の世界」（P一一七～一一三）を踏まえ、各自で音読し、読む順番の分からない箇所、読めない漢字を確認する。その後範読で正しい訓読を確認し、ペアまたは各自で繰り返し音読することで漢文の口調に慣れさせる。大体読めるようになったら指名読みや一斉読みで定着を図る。

❷「書き下し文のまとめ」（P一一三）を参照し、「不」・「之（の）」を平仮名で書き下すことを確認する。

書き下し文の作成はあくまでも初学の段階での訓読の補助・活用や接続を確認する手段であり、書き下すことが目的ではないことを伝えるとよい。

《板書例》

数人飲レ之（ニテ　マバヲ）不レ足（ラ）、
1 2 4 3 6 5
数人にて之を飲まば足らず、

引レ酒（キテヲ）且（二）飲（マント）。
2 1 5 3 4
酒を引きて且に飲まんとす。

＊一度目の読みは漢字、二度目の読みは平仮名にする。

未レ成（ダラ）
3 1（ルニ） 2
未だ成らざるに、
＊一度目の読みは漢字、二度目の読みは平仮名にする。
一人之蛇（の）成（ル）。
1 2 3 4 5
一人の蛇成る。
＊日本語の助詞・助動詞にあたる漢字は平仮名にする。

【評価】ノートに書かれた書き下し文を確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりを理解しているか、分析する。

❸全文を現代語訳してもよいし、「請画レ地為レ蛇、先成者飲レ酒。」「引レ酒且レ飲。」「吾能為二レ之足一。」「未レ成」「蛇固無レ足。」「子安能為二レ之足一。」など一部分を指定して現代語訳（残りは現代語訳を配付）してもよい。

脚注を用いて逐語訳をし、意味の分からない漢字は辞書を引く。本文中の重要単語は巻末の「漢文の重要単語」（P三三五・三三六）を参照する。

現代語訳も書き下しと同様、本文の理解を助ける手段であり、現代語訳することが漢文読解の目的ではないことを確認する。現代語訳を通じて内容を理解した上で、登場人物の関係や行動の理由などについての疑問を挙げてみる。

❹再読文字を二度訓読する理由、訓読・書き下し上の決まりについて確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶「蛇足」は、どのような失敗談なのか説明する。
思判表B⑴イ〔「学習のポイント」2〕

❷「蛇足」の意味を調べ、身近な「蛇足」の例を探す。
知技⑴ウ・エ、⑵イ・エ　主態〔「言葉と表現」1、「言語活動」1〕

❶「学習のポイント」2の解答例を参照。
【評価】「蛇足」はどのような失敗談なのかを的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❷「言葉と表現」1、「言語活動」1の解答例を参照。
【評価】故事成語「蛇足」の由来や意味と、現代の言葉とのつながり理解し、身近な「蛇足」の例を考えようとしているか、行動を点検したり、ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

発問例

●一二六ページ

問　**楚のある長江中流域はどこか、地図で確認せよ。**

補　教科書の後ろ見返しにある「中国新旧参考地図」を使ってもよい。この話の場合は場所を特定することに特に意味はないが、一般的に漢文の学習において歴史と地理とが不可分の関係にあることを折りに触れて意識させたい。

問　**「数人飲レ之不レ足」（3行目）について、**
1　**ここでの「之」は何を指すか。**
2　**「不レ足」とあるが、なぜ「不足」となるのか。**

答　1 司祭者からふるまわれた大杯の酒。
2 数人で分けて飲むと、一人の飲む量があまりにも少なくなるから。

問　**「一人飲レ之有レ余。」（3行目）とあるが、なぜ一人で飲めば「余」るのか。**

答　大杯に満たされた酒の量が多いから。

問　**「請画レ地為レ蛇、先成者飲レ酒。」（3〜4行目）について、**
1　**「請」は、訓読上どの部分と呼応しているか。**
2　**なぜこのような相談をしたのか。**

答　1「飲レ酒」の部分。

語句の研究

●一二六ページ

1蛇足　余計な付け足し。無用のもの。

2祠者　神霊を祭る者。司祭者。祭祀をつかさどる神主。

2賜　上位者が下位者に財貨を与える。ここでは司祭者が召し使いに酒を与えたことを指す。「賜」は英語の第四文型（ＳＶＯＯ）のように「動詞＋人＋物」（人に物を〜）という語順を取る。

2舎人　王侯貴人の側近くに仕えて雑務をつかさどる者。後、近侍の官名となった。ここでは、召し使いのこと。

2巵酒　「巵」は四升（約〇・八リットル）入りの大杯。供えものの神酒を下げ渡したものであろう。

2相謂　相談する。ここでの「相」は、動作が両方からかかり合うことを示す副詞。「互いに・・・し合う」。

3請画レ地為レ蛇、先成者飲レ酒　「請」は自分の考えを述べて賛同を求める気持ちを表す。願望形。他人の動作に関わる場合は「こフ…セヨ」と命令形に読み、「どうか…してください」と訳し、自分（たち）の動作の場合は「こフ…セン」と読み、「どうか…させてください」の意だが、ここでは舎人全員の同意を求めているので、文意に合わせて「…しよう」と訳す。「為」は、「する・行為を行う」の意。ここでは蛇の絵を描くこと。「成」は、「完成する」の意。ここではその絵が出来上がること。

4且レ飲　「且」は「将」と同じく、「まさニ…（ント）す」と読み、「…しようとする」の意。事柄に関して「やがて…になろうとする」という場合と、意志に関して「これから…しようと思う」の意になる場合とがある。ここでは後者。

4乃　「乃」の前後の行為や事情が密接に結びつく場合は「そこで・そして」と訳す。前後の文に時間的・心理的断絶や屈折がある場合「なんと」「かえって」「やっと」などと訳す。ここでは「なんと」と訳してもよい。

5吾能為ニ之足一　「能」は、「能力があってできる」意。同じ可能でも「可」は「状況・道理からしてすることが許されてできる」、「得」は「機会があってできる」意。したがってここでは確かに「吾能為ニ蛇足一」であったかもしれないが、道理のうえでは

[2]何人もで飲めば足りないが、一人で飲めば余るほどの酒の量があるから。

補 [1]願望形の呼応を確認する設問。話者が自分で何かしたいときには意志の助動詞「ん」、相手に何か頼みたいときには命令形にする。

問 「先成」（4行目）の「成」、および「吾能」（5行目）の「能」の意味を、それぞれ熟語を作って考えてみよ。

答 完成・可能

補 漢文を解釈するとき、あるいは漢字の意味を知りたいとき、二字の熟語を作って考えると有効であることを理解させ、習慣づけたい。

問 「左手」「右手」（5行目）の「（モテ）」はどういう意味か。

答 「…で」の意。

補 「もて」は「もつて（以て）」のつまった形。「…で」の意にあたる漢字が原文にないので、送り仮名で意味を補った形。

問 「吾能為（ガ）二之足一（ヲ）」（5行目）について、[1]「為（ガ）二之足一（ヲ）」とは、何をしようとしているのか。

答 [2]これはどのような気持ちから出た言葉か。

[1]出来上がった蛇の絵にさらに足を描き足そうとしている。

[2]蛇の絵を早く描きあげ、酒を手に入れたことで得意になり、自分の力をひけらかしたいという気持ち。自慢する気持ち。

補 [2]会話の意図を考えさせる問いだから、この他にもいろいろなレベルの答えがあり得る。大きく外れない限り許容したい。

問 「子安（クンゾ）能為（ランヤガ）二之足一（ヲ）」（6〜7行目）とあるが、なぜ「足を描けるはずがない」と言っているのか。

答 蛇にはもともと足がないから。

問 「遂（ニ）飲（ムノヲ）二其酒一」（7行目）の(1)「遂」と、「終（ヘリ）二其酒一」（7行目）の(2)「終」は、どちらも「つひに」と読むが、意味は異なる。(1)・(2)の訳語として適切なものを、それぞれ次の中から全て選べ。

(ア) そのまま　(イ) 結局
(ウ) こうして　(エ) その勢いで
(オ) とうとう
(カ) 最終的な結果として

答 (1) (ア)・(ウ)・(エ)
(2) (イ)・(オ)・(カ)

問 「為（ルノヲ）二蛇足一者、終（ヘリ）二其酒一」（7行目）とあるが、先に蛇の絵を描いた者が酒を取られて飲めなかった理由を述べよ。

答 調子に乗って、「蛇の足」という、ありえない余計なものを付け加え、蛇を描いたことにならなかったから。

「吾不レ可（カラ）レ為（ルノヲ）二蛇足一」であったわけである。

「之」が足」の「が」は「我が家」の「が」と同じく連体修飾を表わす助詞。

6固 もちろん。いうまでもなく。もともと。

6子 「し」と読む場合は二人称の敬称。あなた。きみ。「こ」と読む場合は、子どもの意。

6安能為二之足一 反語形。「どうして蛇の足を描けるのか（いや描けるはずがない）。」反語とは、疑問の形を借りて反対の意味に帰着する形であり、「安（クンゾ）能為（クンゾランヲ）」は「不レ能（ハ）レ為（ル）」と同じ意味になる。

キー・ポイント　疑問と反語

疑問と反語は初学者が戸惑う文法事項なので、ここで疑問と反語さらには詠嘆の関係について基本的な点を確認しておこう。それは、この三者は形が同じであるだけでなく、心理のうえでも連続している点に注意すべきだということである。すなわち、疑問とは肯定せずに疑うことだから心理的に否定につながる。この気持ちが前面にでたのが反語である。また、詠嘆とは深く心を動かされたときの、言葉では言い尽くせない感情を表現するものだから、通常の平叙的な表現はとれず、疑問の形をとる。こ

の事情はなにも漢文に限ったことではなく、英語でもそうであるし、現代日本語でも例えば、「えーっ？　あの本ほんとに読んだの?!」などという会話を考えれば、疑問・反語・詠嘆が本来は一つのものであることが納得できよう。

7 遂・終　どちらも「つひニ」と読むが、意味は微妙に異なる。「遂」は、「こうして・そのまま・その勢いで」。「終」は、「最終的に・結局・とうとう」。

句法

蛇固無レ足。　否定形。「無レ…」の形で「…なシ」と読み、「…がない」と訳す。「無」は訓読では「なシ」と読み形容詞として扱うが、本来の漢文では存在を否定する動詞である。対義語である「有」が「所有・存在」を表す動詞であるように、「無」は存在を否定する動詞と考えると、理解しやすい。

子安能為二之足一。　反語形。「安二…一」の形で「いづクンゾ…ンヤ」と読み、「どうして…か、いや…ない」と訳す。初学の段階では反語を含む文の意味を取り間違える生徒が多いが、反語は「疑問の形をした否定文」であることを理解すると間違えにくい。

例　「我安学二漢文一」　私はどうして漢文を学ぶだろうか
（我安くんぞ漢文を学ばんや）
←　意味
「我不レ学二漢文一」　私は漢文を学ばない。
（我漢文を学ばず）
＊「学二漢文一」ということを否定している、と考えればよい。

「我安不レ学二漢文一」　私はどうして漢文を学ばないだろうか。
（我安くんぞ漢文を学ばざらんや）
←　意味
「我無レ不レ学二漢文一」　私は漢文を学ばないことはない。
（我漢文を学ばざるは無し）
＊「不学漢文」ということを否定している、と考えればよい。

解説

この寓話は楚の将軍昭陽が襄陵の戦役（前三三年）で魏に大勝した後、兵を転じて斉を攻めようとしたときのものである。事態を憂慮した斉の閔王のために説客の陳軫が使者にたち、昭陽の説得にあたった。陳軫は「魏軍を全滅させ、敵の将軍を討ちとったのですから最高の官位と爵位はあなたのもの」としたうえで、この例え話をし、これ以上に戦果をあげて恩賞を求めようとするのは、かえって身の破滅を招きかねない、それは蛇足を描くのと同じことだ（戦って勝たざるなくして止まるを知らざる者は、身且に死せんとし、爵且に後に帰せんとす。猶ほ蛇足を為るがごとし）と述べて、昭陽の斉攻撃を思いとどまらせたのである。今日「蛇足」というと、「余分なもの」「不要な付け足し」のような軽

い意味に用いられるが、本来はこのように、調子に乗ってやりすぎると失敗するだけでなくこれまでの成果もだいなしにしてしまう、という強い教訓を含んでいるのである。

参考までに、「戦国策」の教科書本文の前後を次に示す。授業で扱う時間があれば、寓話における「蛇の足」「酒」が何をたとえたものかを考えさせてみても面白いだろう。

［本文］

昭陽為レ楚伐レ魏、覆レ軍殺レ将得二八城一、移レ兵而攻レ斉。陳軫為二斉王一使、見二昭陽一、再拝賀二戦勝一、起而問。楚之法、覆レ軍殺レ将、其官爵何也。昭陽曰、官為二上柱国一、爵為二上執珪一。陳軫曰、異貴二於此一者、何也。曰、唯令尹耳。陳軫曰、令尹貴矣。王非二置二両令尹一也。臣窃為レ公譬、可也。

（教科書本文部分）

今君相レ楚而攻レ魏、破レ軍殺レ将、得二八城一、不レ弱レ兵、欲レ攻レ斉。斉畏レ公甚。公以レ是為レ名亦足矣。官之上非レ可レ重也。戦無レ不レ勝、而不レ知レ止者、身且レ死、爵且二後帰一。猶レ為二蛇足一也。昭陽以為レ然、解レ軍而去。

［書き下し文］

昭陽、楚の為に魏を伐ち、軍を覆し将を殺して、八城を得、兵を移して斉を攻む。陳軫、斉王の為に使ひして、昭陽に見え、再拝して戦勝を賀し、起つて問ふ。楚の法、軍を覆し将を殺さば、其の官爵何ぞや、と。昭陽曰く、官は上柱国と為り、爵は上執珪と為らん、と。陳軫曰く、異に此よりも貴き者は、何ぞや、と。曰く、唯だ令尹あるのみ、と。陳軫曰く、令尹は貴し。王、両令尹を置くに非ざるなり。臣窃かに公の為に譬へん、可ならんか。

（教科書本文部分）

今、君、楚に相として魏を攻め、軍を破り将を殺し、八城を得て、兵を弱めず、斉を攻めんと欲す。斉、公を畏るること甚だし。公是を以て名と為すに亦足れり。官の上に、重ふべきに非ざるなり。戦つて勝たざる無くして、止るを知らざる者は、身且に死せんとし、爵且に後に帰せんとす。猶ほ蛇足を為すがごときなり、と。昭陽以て然りと為し、軍を解いて去る。

［現代語訳］

（楚の将の）昭陽は、楚のために魏を伐ち、魏の軍を倒し、魏の将を殺し、魏の八城を奪うと、兵を転じて斉に攻め寄せた。（斉の閔王はたいへん心配した。）すると（楚の人で、説客の）陳軫が斉王のために使者となって楚に至り、昭陽に会見し、恭しく再拝して戦勝を祝し、立ち上がって尋ねた、「楚の国法では、敵軍を倒し、敵将を殺した場合は、（攻に対して与えられる）官爵はどんなでしょうか。」昭陽は言った、「（かかる場合は）官は上柱国（柱国の最下位）で、爵は上執珪（執珪の最上位）でしょう。」陳軫は、「そのほかに、これより貴いものは、何がありましょうか。」昭陽は、「ただ令尹（楚の宰相）があるだけです。」すると、陳軫が言った、「なるほど、令尹は最高の官職でしょうが、楚王が、二人の令尹を置かれるわけには参りますまい。臣が、内々、公のために譬え話をしてお聞かせしたいのですが、よろしゅうございましょうか。

（教科書本文部分）

いま、あなたは、楚の宰相となって魏の国をお攻めになり、魏の軍を破り、魏の将を殺し、魏の八城を奪い取りながら、その兵力を損なうことなく、さらに斉を攻めようとしておられます。斉では、公を恐れることは、たいへんなものです。公は、これだけでも、名を世にあげられるのに十分です。（今までの功績で受けられる）官爵の上に、さらに増し加えられる官爵があるわけではありません。戦って破れたことがないからと言って、（ちょうどよいところで）止まることをお忘れになると、やがてその身は死し、やがて爵位は後任の者に帰するでありましょう。それでは蛇の足を描くようなものです」と。昭陽は、それを聞いて、「なるほど」と思い、軍を解いて引き揚げた。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **本文を書き下し文にしてみよう。**

【答】「訓読」参照。

▼ポイント▲　会話文の「『……。』と。」の形に注意する。また、「之」が指示代名詞のときには漢字のままで「之」にし、助詞のときは「の」とすることに注意。再読文字は二度目の読みを平仮名で書く。現代日本語の表記でも、付属語（助詞・助動詞）はひらがなで書かれることを紹介するとよい。

2 **「蛇足」は、どのような失敗談であるのか、説明してみよう。**

【答】余分なものを付け加えようとしたための失敗。

▼ポイント▲　足が付いたものは蛇とはいえないことがポイント。足を付け始めたところで蛇でないものになってしまったわけで、「蛇の絵を描く」という競争の趣旨からすれば、勝者としての権利を失うこととなる。

言葉と表現の解答例

1 **「蛇足」という言葉は、現在どのような意味で用いられているか、辞書で調べてみよう。**

【答】余計なもの。なくてもよいむだなもの。

▼ポイント▲　国語辞典・漢和辞典を引かせてもよいが、漢文の窓②「お米の話」を参照することで、文脈から意味を推測させてもよい。

言語活動の解答例

1 **身近な「蛇足」の例を、できるだけ多くあげてみよう。**

【答】この素晴らしい作品に手を入れるなど、蛇足の極みだ。

▼ポイント▲　「学習のポイント」2と「言葉と表現」1を踏まえれば、生徒自身の知識や体験をもとに「蛇足」の例をあげることは難しくないだろう。「教員主導でクラス全員から解答を募る」方法や、「グループで話し合わせた意見を全体で共有する」方法などが考えられよう。一見すると「蛇足」の例とは分からない解答もあるだろうが、その場合は教員が否定をするのではなく、なぜ「蛇足」の例と言えるのか、解答した生徒に説明をさせるとよい。

この活動において、教員は生徒の活発な発言を促す環境を整えるよう心がけたい。

また、「解説」にあげた『戦国策』の前後の文章を生徒に配付し、「蛇足」の寓話がどのような意図で用いられたのか、さらにはもし自分だったら、どのような場面で「蛇足」の寓話を用いるか、という発問をし、発展的学習に広げてもよい。

（宮　利政）

漢文の窓①

中国の寓話と故事成語

「寓話」と呼ばれるものは、他の物事にたとえてなんらかの教訓や観念を語ろうとする物語であり、世界各地で古くから作られてきたと考えられる。ヨーロッパでは、古代ギリシアのイソップ（アイソポス）が寓話の創始者とされている。この「イソップ寓話」（イソップ物語）は、その後世界中に広まった。アジアでは、インドの「ジャータカ」（本生譚）が有名である。これは、釈迦の前生の物語に託して教えを説いたもので、仏典の中にふくまれている場合が多い。こうした世界各地の「たとえ話」を、日本では二十世紀以後「寓話」と呼んでいる。

中国では、「寓話」という呼称よりも、「寓言」という呼び方の方が一般的だった。古代の思想家荘子（荘周）とその著とされる『荘子』について、司馬遷は『史記』荘周列伝で、「其著書十余万言、大抵率寓言也」（其の著書十余万言、大抵率ね寓言なり）と述べている。「荘子の十余万言の著書は、ほとんどみな寓言である」との意である。「寓言」と「寓話」は、ほぼ同じ意味であるが、教科書では、日本で一般的に用いられている「寓話」という呼称を用いている。

寓話は、広い意味ではたとえ話のことだが、動物や植物などに託して、分かりやすく教訓や処世法を語るところに特徴がある。イソップ物語を室町時代に日本語訳した『天草本伊曽保物語』「鹿と蒲萄のこと」の末尾に、「下心」として、「恩を仇を以て報ずれば、天罰逃れずとゆう義ぢゃ」とある。「下心」とは、隠された真意、たとえ話の教訓を意味する。このように、たとえ話の真意・教訓を明示することも古くからおこなわれた。

中国でも、一八四〇年代にイソップ物語が翻訳され、上海で『伊娑菩喩言』が刊行されたが、その「斧頭求柄」（斧の頭が柄を求める話）の最後に、「凡人必須＝各守＝其分一、切勿＝尺寸与レ人」（凡そ人は必ず須く各々其の分を守るべし、切に尺寸も人に与ふる勿かれ）と、教訓が示されている。「およそ人は必ずそれぞれ自分の持っている分（天与の持ち分）を守らなければならない、絶対にほんのわずかでも他人に与えてはいけない」との意で、教訓を明らかにしている。

中国では、ことに戦国時代に数多くの寓話（寓言）が生まれた。この時代、多くの思想家が自己の哲学・政策を主張し、それを各国の君主に説いてまわった。戦国時代は、一面で、遊説者の時代だったのである。彼らは自己の説を分かりやすく、説得力のあるものにするために、たくさんの寓話（寓言）を用いた。先に触れた『荘子』は、寓話によって哲学を語った典型的な例である。そして、そうした戦国時代の寓話の中から多くの故事成語が生まれ、今日まで伝わった。「蛇足」（『戦国策』）、「朝三暮四」（『列子』）は、その例である。もちろん寓話は後代にも作られた。また寓話以外の世界から生まれた故事成語もある。「断腸」（『世説新語』）は、そうした例である。これは後代に、小説から生まれた故事成語である。とはいえ、多くの故事成語が寓話と結びついて生まれてきたことは、後代においても変わらなかった。

（安藤　信廣）

朝三暮四

作者

列禦寇

生没年未詳。「列子」の著者と目されている戦国時代の思想家。鄭国の人。「史記」には伝記がない。前四〇〇年頃の人という説もあるが、その存在を疑う人もある。「荘子」には列禦寇編があるほか、内編および外編の比較的古いとされる編中にもその名が散見する。「列子」天瑞編には、その人となりは恬淡無欲、超然として乱世に身を隠し生死を一にし無差別の境地に入ったとある。その思想の特色は道家思想に基づき、処世観として「虚を貴ぶ」（「尸子」）ことを中心にしているという。その本質は、「智巧を離れ、是非利害の念を離れる」ことにあるとする。唐の玄宗は、その徳を讃えて「沖虚真人」と諡した。

出典

列子

八編。戦国時代の思想家、列禦寇（列子）の著と伝えられるが、魏晋時代の偽作ともいわれる。現在の「列子」は、列禦寇とその門人や後学者が次第に増補したものを、前漢末期に劉向が校定し、さらに東晋時代に張湛が補作したものである。編目は、天瑞・黄帝・周穆王・仲尼・湯問・力命・楊朱・説符から成るが、中心思想は天瑞と黄帝の二編に見られ、「老子」の学説を受け継いでいる。文章は「荘子」に並び称される。その思想は寓言をもって語られ、その中には「愚公山を移す」「疑心暗鬼を生ず」「多岐亡羊」「杞憂」など、有名なものが多い。唐代になると、「老子」「荘子」と共に尊重され、道教の根本経典として「沖虚至徳真経」と称された。本文は「黄帝第二」からとった。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　列子」（小林信明著）によった。

参考文献

❊ 教師用
「列子」（新釈漢文大系）小林信明　明治書院　昭四十二
「列子」（中国古典新書）穴沢辰雄　明徳出版社　昭四十四
「列子　上・下」（岩波文庫）小林勝人　昭六十二
「列子」（東洋文庫）福永光司　平凡社　平三
❊ 生徒用
「列子　上・下」（岩波文庫）小林勝人　昭六十二
「漢文力」（中公文庫）加藤徹　平十九

要旨

宋の国に「狙公」と呼ばれる人がいた。猿を多く飼っていたが、まもなく食糧が少なくなった。そこで、「狙公」は猿たちに食糧の数を減らす提案を受け入れさせようと言葉巧みにだまし、結果それを承諾させた。

構成

全文一段落。

図版解説

〈群猿図〉

兵庫県香美町大乗寺蔵。江戸時代後期。長沢蘆雪筆。長沢蘆雪は、江戸時代の絵師で、円山応挙に師事した。芦雪独特の大胆な構図や筆の勢いにまかせた描き方は、応挙門下の中でも特異で、奇想の絵師、応挙門下の異才などと称される。本作品は、八面の襖絵で、紙本淡彩の技法で描かれている。⇩P 129

〔参考〕大乗寺円山派デジタルミュージアム
http://museum.daijyoji.or.jp/02kyaku/02kai/02_01_11k.html

訓読と現代語訳

①宋に狙公といふ者有り。②狙を愛し、之を養ひて群れを成す。③能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得たり。④其の家口を損して、狙の欲を充たせり。⑤俄かにして匱し。⑥将に其の食を限らんとす。⑦衆狙の己に馴れざるを恐るるや、先づ之を誑きて曰はく、「若に芧を与ふるに、朝に三にして暮れに四にせん。足るか。」と。⑧衆狙皆起ちて怒る。⑨俄かにして曰はく、「若に芧を与ふるに、朝に四にして暮れに三にせん。足るか。」と。⑩衆狙皆伏して喜ぶ。

①宋の国に「狙公」と呼ばれる者がいた。②猿をかわいがり、飼っている猿が群れをなしていた。③（「狙公」は）猿の気持ちを理解することができ、猿もまた「狙公」の気持ちを知ることができた。④（「狙公」は）家族の食糧を減らして（までも）、猿の食欲を満たした。⑤まもなくして（食糧が）少なくなった。⑥（そこで、）猿のえさを制限しようとした。⑦（だが、）猿の群れが自分に懐かなくなることを心配して、まず猿をだまして言った、「お前たちにどんぐりの実をやるのに、朝に三つで暮れに四つにしたい。足りるか。」と。⑧（すると、）猿の群れは皆立ち上がって（少ないと言って）怒った。⑨まもなくして言った、「お前たちにどんぐりの実をやるのに、朝に四つで暮れに三つにしたい。足りるか。」と。⑩猿たちは皆腹ばいになって喜んだ。

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶返り点に従い、本文を自分で繰り返し音読する。
❷書き下し文をノートに書く。知技⑵ウ
❸脚注を参照して現代語訳し、疑問点を指摘する。
❹再読文字の用法を確認する。知技⑵ウ

❶「訓読の世界」（P一一七〜P一二三）を踏まえ、各自で音読し、読む順番の分からない箇所、読めない漢字を確認する。
次にペアで音読し合い、「レ点」「一・二点」「レ点」の用法や、置き字の「而」「焉」「於」を音読しないことを確認する。
その後範読で正しい訓読を確認し、ペアまたは各自で繰り返し音読することで漢文の口調に慣れさせる。「能」「亦」「俄而」

「将限」「足乎」の読みに注意する。

大体読めるようになったら指名読みや一斉読みで定着を図る。

❷「書き下し文のまとめ」（P一二三）を参照し、「不」「之」「也」「乎」を平仮名で書き下すこと、置き字の「而」「焉」「於」は書き下し文には書かないことを確認する。

書き下し文の作成はあくまでも初学の段階での訓読の補助・活用や接続を確認する手段であり、書き下すことが目的ではないことを伝えるとよい。

《板書例》

能解（クシ）二狙之意（ヲ）一、狙亦得（モ・タリ）二公之心（ヲ）一。
1 5 2 3 4　6 7 11　8 9 10

能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得たり。

俄（カニシテ）而匱（シ）焉。
1　×2×

俄かにして匱し。

将（ニ）レ限（ラントス）二其食（ヲ）一。
5 1　4　2 3

将に其の食を限らんとす。

恐（ルル）二衆狙之不（ル）レ馴（レ）於己（ニ）一也、
7　1 2 3 6　5　×4　8

衆狙の己に馴れざるを恐るるや、

朝三（ニ）而暮四（レニセン）。足乎（ルトヤ）。」
1 2　×3 4　1 2

朝に三にして暮れに四にせん。足るか。」と。

【評価】ノートに書かれた書き下し文を確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりを理解しているか、分析する。

❸全文を現代語訳してもよいし、書き下しの板書例を挙げた部分など一部分を指定して現代語訳（残りは現代語訳を配付）してもよい。

脚注を用いて逐語訳をし、意味の分からない漢字は辞書を引く。本文中の重要単語は巻末の「漢文の重要単語」（P三三五・三三六）を参照する。

現代語訳も書き下しと同様、本文の理解を助ける手段であり、現代語訳することが漢文読解の目的ではないことを確認する。

現代語訳を通じて内容を理解した上で、登場人物の関係や行動の理由などについての疑問を挙げてみる。

❹再読文字を二度訓読する理由、訓読・書き下し上の決まりについて確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことをまとめる。知技(1)エ、思判表B(1)イ
〔「学習のポイント」1〕

❷二つの漢数字が用いられている四字熟語を探す。
〔「言葉と表現」1〕

❸「朝三暮四」の意味を調べる。知技(1)ウ 〔「言葉と表現」2〕

❹❶を踏まえて身近な例を探す。知技(2)エ 主態 〔「言語活動」1〕

❶「学習のポイント」1の解答例を参照。
漢文の窓①を参照し、「寓話」というものの特徴について把握させる。ここは、寓話の解釈に多様性があるということを気づかせるための問い。「狙公」と「衆狙」のそれぞれに主眼を置いた場合で寓話の解釈が変わってくることに気づかせる。まず、寓話のあらすじを、「狙公」と猿たちとのやり取りから、丁寧にまとめる。その上で、「狙公」に主眼を置いた場合と「衆狙」に主眼を置いた場合の二つから、この寓話の解釈を考える。

【評価】「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことを本文に即して的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

❷資料集・漢和辞典で調べさせる。
「言葉と表現」1の解答例を参照。

❸漢和辞典・国語事典で調べさせる。漢文の窓②の新聞記事を参照し、「朝三暮四の経済政策」という題名からどのような記事の内容を思い浮かべるか、考えさせてもよい。
「言葉と表現」2の解答例を参照。

【評価】「朝三暮四」の意味を調べ、新聞記事でどのように使われているか確認し、語彙を豊かにしているか、分析する。

❹寓話の登場人物の特徴を理解し、生徒の身近な環境で、生徒自身がだます側・だまされる側となる場面や、他人がだます側・だまされる側となる場面を想起させることで理解を深める。
「言語活動」1の解答例を参照。

【評価】故事成語「朝三暮四」の現代の言葉とのつながり理解し、身近な「朝三暮四」の例を考えようとしているか、行動を点検したり、ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

発問例

●一二八ページ

問 **「狙公」が猿たちをかわいがっていたということが分かるのは、どの箇所か。**

「損二其家口一充二狙之欲一」「恐二衆狙之不レ馴二於己一也」

問 **「狙之欲」（3行目）の「欲」とは具体的には何のことか。**

答 食欲。

補 直前に「損二其家口一」（家族の食糧を減らして）」とあることから判断する。

問 **「恐二衆狙之不レ馴二於己一也」（4行目）について、(1)書き下し文にせよ。(2)「恐」とあるが、誰が何を「恐」れたのか、説明せよ。**

答 (1)衆狙の己に馴れざるを恐るるや、(2)「狙公」が、猿たちが自分に懐かなくなることを恐れた。

補 「衆狙之不レ馴レ於己一也」に着目させる。

問 **「与二若芧一」（5行目）を「於」を用いて書き換えよ。**

答 与二芧於若一。

補 P一二〇の置き字の働きを参照する。英語の第四文型の書き換えを想起すると分かりやすい。（give IO DO→give DO to IO）

問 **猿たちは、なぜ「朝三而暮四」（6行目）**

語句の研究

●一二八ページ

2宋 春秋戦国時代の国名。現在の河南省商丘県にあった。殷の宗族・微子啓（殷の紂王の異母兄）が封ぜられ、殷の遺民を統治したという。先秦の文献に見える笑い話には、愚かな人物として宋人が多く登場するといわれる。（「助長」「宋襄の仁」「守株」「不亀手の薬」など。）前二八六年に斉・楚・魏の三国に滅ぼされた。

2狙公 猿飼いに付けた名。猿飼いの親方。実在の人物ではなく『列子』の作り上げた架空の職業的人物であろう。一説に、個人名とする。「狙」は猿。「公」は祖父・父・長老・年長者に対する尊称。

2愛 かわいがる、大切にする、の意。「寵愛・愛児」。他に好む（「愛飲・愛唱」）の意もある。

2養レ之 猿を飼う。「養」は「飼う」。「之」は動詞の後にある場合は「これ」と読む代名詞。ここでは猿を指す。

2能 ～できる。「よク」と訓読する副詞。「不能～」の場合は「あたハず」と訓読する。

2狙之意 猿の気持ち。「之」は名詞の後にある場合は「の」と読む助詞。ここでは「狙」（連体修飾語）と「意」（被修飾語）の間に置かれて、修飾の関係（～の）を表している。

3得二公之心一 「狙公」の気持ちを知ることができる。「能得二公之心一」の略。前句と対句。「得」は知る。「亦」は「～もまた」という同等の意でとらえる。猿の方にも「狙公」の猿をかわいがっていた気持ちが通じていたということ。

3損二其家口一 家族の食糧を減らす。「狙公」が、自分の家族の食いぶちを減らしたことを指す。「損」は減らす。「減損」。「家口」は、家族の人数をいうが、ここでは家族の食糧とした。

3充二狙之欲一 猿たちの食欲を満たす。「狙公」が、猿が飢えないように配慮していたことが窺える。「充」は満たす。いっぱいにする。「欲」は食欲。

3俄而 まもなくして、の意。一説に、突然に・急に、の意とする。「俄」は「にはカニ」と訓読してやがて・まもなくの意。他に「にはカニ」と読む漢字として、「遽」（あわて急いで）、「驟」（急に早足でやって

答　「狙公」が朝食前にこの話を持ちかけたので、猿たちは目前の朝食の量だけに気持ちが集中し、その量が少ないと怒ったと考えられる。

問　**◉衆狙が喜んだ（7行目）のは、なぜか。**

答　猿たちは、信頼している「狙公」に朝食前に「朝三而暮四」と提案されて怒るが、まもなく「朝四而暮三」と再提案されると、「朝三」から「朝四」に変わったことによって食糧の数が多くもらえると勘違いし（思い込み）、喜んだのである。

問　**「狙公」は、どのような話術でだまそうとしたか。**

答　「狙公」は、食糧の全体数を減らすことを猿たちに承諾させようと、交渉する。その時に用いた、だましの話術（レトリック）は次のようになろう。①人には目の前の利益に手を出してしまうという心理がその根底にあることを利用して、②朝食前に「朝三而暮四」と提案する。これによって、猿たちは朝食の数量だけに気持ちが集中しまう。その上で、③「朝三而暮四」を「朝四而暮三」と修正した案を出し、全体の数は変わらないのに朝食の数の変化だけによって（実質の数、七は変わらない案）、いかにも「朝四」の方が食糧の数が増えたかのように）などがある。

くる。「驟雨」）、「卒」（思いがけなく突然

4 匱焉　食糧が少なくなる、または、経済的に乏しくなるの意。一説に、「匱」は「饑」と同じで、凶作。どんぐりの実が少ない状態になる。つまり、どんぐりの実が凶作によって欠乏するとする。どちらにしてもどんぐりの実が手に入りづらくなったことには変わりがない。「焉」は、断定の意を表す置き字（終尾詞）としたが、「匱レ焉（これニシ）」と訓読し、猿のえさが少なくなった、としてもよい。

4 将レ限ニ其食一　猿たちの食いぶち（どんぐりの数）を制限しようとした。「将」は、「これから～しようとする」。現在はまだそのことが起こっていないが、近くこれから起ころうとすることを表す再読文字。（「句法」参照。）「限」は制限する。

4 恐　心配する。気遣う。まだ起こらないことについて、おそれる。疑い・気遣い・あやぶみ思案する気持ちを含む。他に「おそれ」と読む漢字として、「怖」（びくびくする。怖がる。）、「畏」（おそれかしこまる。）、「懼」（用心しつつ疑い懼れる。）、「慄」（ぞっとして震える。）などがある。

4 之　名詞句の中の主語と述語の間に置かれる助字。ここでは「衆狙」（主語）と「不レ馴ニ於己一」（述語）の間に置かれ、全体として「恐」の目的語となる名詞句を形成している。

4 不レ馴ニ於己一　自分に懐かなくなる。「馴」は、（動物が人に対して）懐く。従いなれる。言うことをきく。「従順」の「順」と同じ。「したがフ」と読んでもよい。

4 也　文中で「や」と読む場合、強調を表す助字。文末で「なり」と読む場合は、断定を表す助字。

5 誑　だます。たぶらかす。

5 若　お前たち。「汝」と同じく対等か目下に対して用いる二人称の代名詞。

5 芧　どんぐりの実。一説に、とちの実・栗とする。

5 朝三而暮四　朝は三つで暮れに四つにしたい。どんぐりの実を朝食用に三つ夕食用に四つ与えよう。会話の中なので、省略された主語は会話の主体である「狙公」。述語の「三」「四」は名詞ではなく、餌を「三つにする」「四つにする」という動詞として訓読している。「朝」「暮」は動詞を修飾しているので副詞。

ように見せかけ（数字のトリック）、猿たちをだますのである。

補 本文を吟味すれば、だまされた筋立てを理解することはさほど難しくないであろう。ただ、人には目の前の利益に手を出してしまうという心理がその根底にあるといっても、本当にそのようなこと（数字の入れ替え）でだまされるのかという疑問も生じよう。そこで、話し合いの中でその可能性について論争したい。このことについて加藤徹は「本質的に同じことでも、生起する順番を変えるだけで、印象はがらりと変わる。ここに人間の思考力の限界があるのかもしれぬ。事柄が生起する順番を逆にするとがらりと印象が代わってしまう、という『思考の線条性の罠（わな）』のことを、古代中国人は「朝三暮四（ちょうさんぼし）」と呼びました。」（「21世紀の教養」シリーズ第3巻・［共編］上領達之・高谷紀夫・岩永誠・中坂恵美子『人間理解のコモンセンス』培風館）と指摘する。また、「言葉の言い換えによる大衆操作のことを、漢文では『朝三暮四』と言います。」（加藤徹『漢文力』中央公論新社）ともある。人間の脳は、案外刹那的で、簡単なこと（「朝三暮四」→「朝四暮三」）で騙されてしまうのがむしろ通例なのかもしれない。

句法

将レ限二其食一。「将」は再読文字。「まさニ〜（ント）す。」と読み、「これから〜しようとする。」の意。現在はまだそのことが起こっていないが、近くこれから起ころうとすることを表す場合に用いる。「且」もほぼ同じように用いられる。「将」は他にも「ひきキル（将軍）」や「はタ」「もつテ」など多くの読みを持つので辞書で確認させてもよいだろう。

恐二衆狙之不レ馴二於己一也　「也」は文末や文中に用いる助字。文末に用いる場合は断定（「なり」）・疑問（「〜か」）の意。文中に用いる場合は、句末に用い「や」と読み、句を強調・提示したり条件文を作ったりする。ここでは、強調。

足乎。文末に用いる疑問の助字。「〜か。」の意。「か」と読み、用言の連体形または体言に接続する。

解説

I 『列子』の論評

『列子』の「朝三暮四」には、教科書で取り上げた部分の後ろに以下の論評が続いている。

6 起而怒　猿たちは皆立ち上がって怒った。立ち上がって少ないと言って怒ったのである。狙公は朝食前にこの話を持ちかけたので、猿たちは目前の朝食の量が少ないので怒ったと考えられる。

6 朝四而暮三　朝は四つで暮れは三つにしたい。

7 伏而喜　腹ばいになって喜んだ。「伏」は腹ばいになる。腹を地面に付ける。喜ぶ様子を具体的に表現した言葉。「起而怒」と「伏而喜」は対句。

［本文］

物之以二能鄙一相籠、皆猶レ此也。聖人以レ知籠二群愚一、亦猶三狙公之以レ知籠二衆狙一也。名実不レ虧、使二其喜怒一哉。

［書き下し文］

物の能鄙を以て相籠むる、皆猶ほ此くのごときなり。聖人の知を以て群愚を籠むる、亦猶ほ狙公の知を以て衆狙を籠むるがごときなり。名実虧けずして、其れをして喜怒せしむるかな。

［現代語訳］

（そもそも）物事に対する（知恵を持つ）賢者と（持たない）愚者という差によって（賢者が愚者を）言いくるめるのは、全てこの話のようなものである。聖人が知恵を働かせて多くの愚か者を言いくるめるのも、ちょうど「狙公」が知恵を働かせて猿たちを言いくるめるようなものである。名目と実質は同じことであるのに、相手を喜ばせたり怒らせたりしているのだなあ。

Ⅱ『荘子』の「朝三暮四」

「朝三暮四」の出典とされる文献には『荘子』斉物論篇と、教科書本文『列子』黄帝篇との二つがある。ここで、この二つを比較してみるとその意味付けに大きな違いがあることが分かる。（ここでは『荘子』の本文のみを記す。）

［本文］

労二神明一、為レ一而不レ知二其同一也、謂二之朝三一。何謂二朝三一。曰、『狙公賦レ芧曰、『朝三而暮四。』衆狙皆怒。曰、『然則朝四而暮三。』衆狙皆悦。」名実未レ虧而喜怒為レ用、亦因レ是也。是以聖人和レ之以二是非一、而休二乎天鈞一。是之謂二両行一。

［書き下し文］

神明を労すれども、一為りて其の同じきを知らざる、之を朝三と謂ふ。何をか朝三と謂ふ。曰く、「狙公、芧を賦して曰く、『朝には三にして暮には四にせん』と。衆狙は皆怒る。曰く、『然らば則ち朝には四にして暮には三にせん』と。衆狙は皆悦ぶ。名実未だ虧けざるに、喜怒用を為すは、亦是とするに因るなり。是を以て聖人は、之を和するに是非を以てして、天鈞に休ふ。是れを之れ両つながら行はると謂ふ。

［現代語訳］

人間は貴い心をいじめつけるだけで、物は、本来、おしなべて一つであるのに、その同じであることを知らずによしあしの区別を立てている、これを「朝三（の知恵）」という。「朝三」とは何かといえば、次のような話がある。狙公がどんぐりの実を猿たちに分配しようとして言った、「朝は三つずつにして夕方は四つずつにするぞ」と。猿たちはみんな怒った。そこで「それなら、朝は四つずつにして、夕方には三つずつにしよう」と言ったところ、猿たちはみんな喜んだ、というのである。朝と夕方とのわずかな相違はあっても、すべてで七つずつという数も、一日にそれがもらえるという実質も変わりがないのに、喜びと怒りと違った対応をしたのは、やっぱり目前の朝の利益がいいと思ったからだ。人間も猿を笑えない。されば、聖人は物の是非を一つにして、それを絶対の道が運（めぐ）らすままに任せきるのである。これが、是も非もなんのこだわりもなく自然に行われるということである。（赤塚忠『全釈漢文大系16「荘子上」集英社』によるが、一部改作した。）

Ⅲ『列子』の「朝三暮四」と『荘子』の「朝三暮四」

『列子』は、「朝三暮四」という寓話を用い、その思想的立場から「儒者が知恵を用いて言葉巧みに民衆をたぶらかし統治している」と説き、「儒家」を批判する。『荘子』は、猿たちに重きを置き、「万物斉同」（物事には区別や差別などはなく、すべては等しい価値を持つということ）の視点から「『名実』は違わないのに、名だけ変われば、それに一喜一憂している。すべて道理は一つであるという偏見のない心をもたなければならない。」と説く。つまり、「わずかな言葉の違いによって感情を発露させてしまう人間の愚かさを、『朝三暮四』と『朝四暮三』とに踊らされる猿にたとえた。こうした表面的な違いにまどわされることなく、『是非』の価値判断を超越した境地に身を置くことが重要であるという主張」（湯浅邦弘『故事成語の誕生と変容』角川学芸出版）なのだ。

この二つの文章を比べてみると、『列子』の方は「狙公」に視点を当て、その話の展開が容易であるばかりかストーリー性も豊かである。しかし、深みにかける。それに対し『荘子』は猿たちにスポットを当て、「万物斉同」という思想を人々に効果的に印象付ける。そのため、深みはあるが寓話の面白みに欠ける。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「狙公」「衆狙」それぞれの立場に主眼を置き、この寓話が伝えたいことをまとめてみよう。**

【答】 この話は「狙公」に主眼を置くと、「（賢い者は）うまい言葉で人をだます。」ということを伝えようとしていると解釈できる。また、「衆狙」に主眼を置くと、「（愚か者は）目先の利益にこだわって全体が見えず、結果が同じになることに気づかない。」ということを伝えようとしていると解釈できる。

▼ポイント▲ ここは、寓話の解釈に多様性があるということを気づかせるための問い。まず、寓話のあらすじを、「狙公」と猿たちとのやりとりから、丁寧にまとめさせる。その上で、「狙公」に主眼を置いた場合と、「衆狙」に主眼を置いた場合の二つから、この寓話のみの解釈を考えさせる。（この二つの立場については、指導者が助言するとよい。）この二つの解釈は、国語辞典・漢和辞典に記載されているのでそれを参考に考えさせれば解答は容易に出よう。

言葉と表現の解答例

1 **二つの漢数字が用いられている四字熟語を探してみよう。**

【答】 一日三（千）秋・一暴十寒・三寒四温・四苦八苦・七転八倒・八面六臂・九牛一毛など。

▼ポイント▲ 漢和辞典などで、数字の項目に記載されている四字熟語を調べさせればよい。他に資料集や四字熟語辞典を活用してもよい。

2 **「朝三暮四」という言葉は、現在どのような意味で用いられているか、辞書で調べてみよう。**

【答】 ①表面的な相違や利害にとらわれて結果が同じになることに気づかぬこと。②うまい言葉で人をだますこと。③命をつなぐだけの生活。生計。

▼ポイント▲ 国語辞典・漢和辞典を活用する。ちなみに、現代中国語では「ころころめまぐるしく変わる」という意味で使用する。

言語活動の解答例

1　この寓話の「狙公」と「衆狙」は、身の周りではどのような人に置き換えられるか、考えてみよう。

【答】（例）教員と生徒。政治家と国民。

▼ポイント▲「学習のポイント」1と「言葉と表現」2の活動を踏まえて考えさせる。まずは各自で考え、その後ペアやグループに分かれて意見を交換するとよい。

「狙公」が猿たちを言葉巧みに籠絡したという寓話は、「狙公」に主眼を置いて解釈すると、「うまい言葉で人をだますこと。」をたとえたものと解釈できる。一方、「衆狙」に主眼を置いて解釈すると、「目先の利益にこだわって全体が見えず、結果が同じになることに気づかない。」ということをたとえたものと解釈できる。言葉巧みに人をだます場面は様々考えられるだろうが、この言語活動では、だまされる側が「目先の利益にこだわる」という状況が必要である。

生徒には、目先の利益にこだわってだまされる状況を想像させるとよいだろう。試験範囲が狭くなることに反対する生徒は少ないだろうが、狭くなった分の学習はやがてどこかで学ぶ必要があることは意外と見落とされる。また、給付金が配られることに反対する国民は少ないが、配られた分のお金はいつか国民が税金として負担する日が来ることは意識されにくい。

（宮　利政）

断腸

作者

劉義慶

四〇三年～四四四年。六朝時代の宋の武帝の甥で、臨川王の称号を継ぎ、中書令・荊州刺史・江州刺史を歴任した。文学を愛好し、その幕僚には袁淑・鮑照など一流の文人を多く集めた。『世説新語』は実際にはこれらの文人たちの手によって編纂されたものとされている。

出典

世説新語

三巻。後漢から魏・東晋末に至る知識人の逸話を集めたもの。逸話の内容によって、いわゆる孔門四科の徳行・言語・政事・文学に始まり、方正・雅量など三十六篇に分類して収める。三国対立から晋の東遷に至る不安と混乱の時代に、個性・教養・機知にあふれ、自由奔放な生き方を求めた人々の姿が簡潔な文章で生き生きと描かれており、六朝文学を代表するとともに、この時代の文化史・思想史の資料としても貴重なものである。梁の劉孝標の注が優れる。本文は「黜免」篇第二十八第二話からとった。「黜免」とは、官位を落とされたり免職されたりすること。本教科書は、明治書院『新釈漢文大系　世説新語　下』（目加田誠著）によった。

参考文献

❊ **教師用**

「世説新語」（新釈漢文大系）目加田誠　明治書院　昭五十
「世説新語」（中国の古典）竹田晃　学習研究社　昭五十九
「世説新語」（鑑賞中国の古典）井波律子　角川書店　昭六十三
「中国人の機知」（中公新書）井波律子　昭五十八
「中国の隠遁思想」（中公新書）小尾郊一　昭六十三

❊ **生徒用**

「世説新語」（新書漢文大系）目加田誠　明治書院　平十五

要旨

子猿を捕まえられた母猿が悲しみのあまり死んでしまったのを見て、桓公は子猿を捕まえた部下を罰した。

構成

全文一段落。

訓読と現代語訳

①桓公蜀に入り、三峡中に至る。②部伍の中に猨子を得る者有り。③其の母岸に縁りて哀号し、行くこと百余里なるも去らず。④遂に跳りて船に上り、至れば便即ち絶ゆ。⑤其の腹中を破り視れば、腸皆寸寸に断えたり。⑥公之を聞きて怒り、命じて其の人を黜けしむ。

①桓公が蜀に（船で）攻め入り、三峡にさしかかった。②桓公の部隊の中に猿の子を捕まえた者がいた。③子猿の母は岸に沿って（後を追って）悲しげに鳴き叫び、百里余り行ってもつきまとって離れなかった。④そのうちに母猿は船に跳び乗り、到達するとすぐに息絶えてしまった。⑤母猿の腹を割いて調べてみると、はらわた（内臓）がどこもかしこもずたずたにちぎれていた。⑥桓公はこの話を聞いて怒り、命令してその部下の地位を下げさせた。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 返り点に従い、本文を自分で繰り返し音読する。
❷ 書き下し文をノートに書く。[知技(2)ウ]
❸ 脚注を参照して本文を現代語訳し、疑問点を指摘する。[思判表B(1)オ]
❹ 桓公が、猨子を得た者を「黜」けた理由を説明する。[知技(1)エ、思判表B(1)ア・イ]　〔「学習のポイント」1〕

❶「訓読の世界」（P一一七～一二三）を踏まえ、各自で音読し、読む順番の分からない箇所、読めない漢字を確認する。
　次にペアで音読し合い、「上・下点」、熟語に戻る用法や、「不」の読み方を確認する。
　その後範読で正しい訓読を確認し、ペアまたは各自で繰り返し音読することで漢文の口調に慣れさせる。「入」「中」「得」「遂」「便即」「腸」「寸寸」の読みに注意する。
　大体読めるようになったら指名読みや一斉読みで定着を図る。
❷「書き下し文のまとめ」（P一二三）を参照し、「不」を平仮名で書き下すことを確認する。
　書き下し文の作成はあくまでも初学の段階での訓読の補助・活用や接続を確認する手段であり、書き下すことが目的ではないことを伝えるとよい。

展開

《板書例》

有下得二猨子一者上。
5 3 1 2 4
猨子を得る者有り。

破レ二視其腹中一ヲ
4 5 1 2 3
其の腹中を破り視れば、

【評価】 ノートに書かれた書き下し文を確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりを理解しているか、分析する。
❸ 全文を現代語訳してもよいし、書き下しの板書例を挙げた部分など一部分を指定して現代語訳（残りは現代語訳を配付）してもよい。
　脚注を用いて逐語訳をし、意味の分からない漢字は辞書を引く。本文中の重要単語は、巻末の「漢文の重要単語」（P三三五・三三六）を参照する。
　主語の省略されている文については、文脈から推測し、補ってみる。

現代語訳も書き下しと同様、本文の理解を助ける手段であり、現代語訳することが漢文読解の目的ではないことを確認する。

現代語訳を通じて内容を理解した上で、登場人物の関係や行動の理由などについての疑問を挙げてみる。

【評価】本文の内容を理解し、登場人物の関係や行動の理由などについて疑問点を指摘することで、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、確認する。

❹「公聞レ之怒」とあるので、桓公が何に対して怒りを感じたのか、というところから考える。

「学習のポイント」1の解答例を参照。

【評価】桓公が、猨子を得た者を「黜」けた理由を本文に即して的確に捉えているか、ノートや提出物などにより確認する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶「断腸」の意味を調べる。〔「言葉と表現」1〕

❷故事成語の元となった話を調べる。知技(2)イ〔「言葉と表現」2〕

❸「断腸の思い」という表現を用いて小話を作る。知技(2)エ 主態〔「言語活動」1〕

❶漢和辞典・国語辞典で調べさせる。漢文の窓②『三国志』を参照してもよい。

「言葉と表現」1の解答例を参照。

❷漢和辞典・国語辞典・資料集・インターネットで調べさせる。

「言葉と表現」2の解答例を参照。

【評価】「言葉と表現」2の故事成語について、歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❸漢文の窓②『三国志』を読み、参考としてもよい。

「言語活動」1の解答例を参照。

【評価】故事成語「断腸」の現代の言葉とのつながり理解し、「断腸の思い」という言葉を用いて小話を作っているか、行動を点検したり、ワークシートの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

発問例

●一三〇ページ

問　**「蜀」「三峡」（2行目）を地図で確認せよ。**

補　地理を確認することによって、単に文字だけ追っているのとは異なった、作品に対する具体的なイメージを持てるようになる。さらに地理から進んで、歴史的な興味へと発展させる契機にもなる。

問　**①「其」（3行目）、②「其」（4行目）、③「其人」（5行目）が指すものを、それぞれ本文中の語で答えよ。**

答　①猨子　②母（其母）　③得（ル）猨子（ヲ）者

問　**「其母縁レ岸（リテ）哀号（シ）」（3行目）について、**

1 現代語訳せよ。

2 A「哀号」における「号」と同じ意味の「号」を含む熟語を答えよ。

B「哀号」における「号」と同じ意味の「号」を含む熟語を次の中から選べ。

(ア)記号　(イ)信号　(ウ)号砲　(エ)号泣

答　1 子猿の母は岸に沿って（後を追って）悲しげに鳴き叫び

2 A 号泣（怒号）

B (エ)

問　**「行（クコト）百余里（ナルモ）不レ（ウ）去。」（3行目）とあるが、母猿はなぜこのような行動をとったのか、理由を説明せよ。**

答　奪われた子猿を、何とかして取り返そうとしたから。

問　**「遂跳（ニリテ）上レ（ニ）船、至（レバ）便即（チユ）絶。」（3行目）について、**

1 適切な言葉を補って現代語訳せよ。

2「絶（ユ）」のここでの意味を「絶」を含む二字の熟語で示せ。

答　1 そのうちに母猿は船に跳び乗り、すぐに息絶えてしまった。

2 絶命

問　**「腸皆寸寸断。」（4行目）とあるが、なぜそうなったのか。**

答　子猿を奪われた悲しみや心痛のため。

補　中国では、猿の声は悲しみを誘われるものだった。我が国の感覚と異なる点である。百人一首の「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声聞くときぞ秋は悲しき」（猿丸大夫）などが思い合わされるところである。「解説」参照。

問　**「公聞レ之（キテヲ）怒」（4行目）について、**

1「之」が指す内容を本文中から抜き出し、初めと終わりの三字で答えよ。（句読点は含まない）

2「桓公」はなぜ怒ったのか、説明せよ。

答　1 部伍中～寸寸断

2 部下が子猿を思う母猿の情を理解せず、子猿を捕まえたから。

語句の研究

●一三〇ページ

1 断腸　はらわたがちぎれるような思いの悲しみ。非常な悲しみの例え。腸断とも。

2 桓公　桓温。三一二年～三七三年。東晋の武将で北朝との戦いに功績をたて、二十数年にわたって事実上東晋王朝を支配した。

2 入レ蜀　「蜀」は、中国の西に位置し、山々に囲まれた広大な地域。土地は肥え、要害の地であった。蜀の地は晋末に李雄が帝号を称して自立したが（成漢）、三四六年、桓温が攻め入り、李勢を討って東晋の領土となった。

2 三峡　瞿塘峡・巫峡・西陵峡を指す。長江が蜀の山地から楚の平野に入る辺りに続く険しい峡谷。

2 部伍　部隊。「伍」は、もと五人一組の軍隊の最小単位。転じて、「くみ・仲間」の意。

2 猨子　猿の子。「猨」は猿に同じ。

3 縁　…に沿って。

3 哀号　悲しい声で叫ぶ。「号」は叫ぶ。

3 行百余里　漢文（中国語）では数量を表す語は動詞の下に置かれるので、必ず「行（クコト）」

問「**命黜二其人一**（ソノヒトヲシリゾケシム）」（5行目）について、

1 A **句法に注意して現代語訳せよ。**

B **ここで使われている句法の名称を答えよ。**

2 **桓公が猿の子を捕まえた部下を「黜」けるよう命じたのはなぜか。**

答 1 A 命令してその部下の地位を下げさせた。

B 使役

2 相手が動物とはいえ、残酷な仕打ちをしたことが許せないと考えたから。

問「**断腸**」**という語について、**

1 **日本語では一般的にどのように使われているか。**

2 **前問 1 の意味を答えよ。**

答 1 断腸の思い

2 この上もなく悲しく、痛ましいこと。

解説

「黜免」篇には降格・免職に関わる逸話が載せられており、降格・免職をされる側の人、する側の人それぞれの事情や理由を通して、おのずと人物評価が浮かび上がってくる仕掛けになっている。この「断腸」も含めて、桓温については部下を免職させた話が数篇載っているが、いずれも権力者にありがちな恣意的なものでなく、筋の通った人間味を示している。すなわちこの話は本来、桓温の人間味や度量を示すための逸話であるわけだから、そこに一つのポイントを置いて読むべきである。ただし、「断腸」という成語自体は母猿の行為から生まれたものであって、桓温の人柄などとは関係がない。つまり原典の趣旨と故事成語としての意味とにずれがあるわけで、これもありがちな言葉の現実の姿としてもう一つのポイントになる点である。

なお、中国では猿はキーッと鳴き、悲しみを誘うものとされ、とりわけこの話の舞台でもある三峡は猿が多く、しばしば詩文に歌われている。杜甫、「登高」の「風急天高（カゼキフニシテテンタカク）猿嘯哀（エンショウアイナリ）、渚清沙白（シャセイニシテスナシロク）鳥飛廻（トリヒカイス）」は最も有名。また李白にも「両岸猿声啼（エンセイテイス）不レ住（トドマラ）、軽百余里」の語順になる（「百余里行」の語順にはならない）。上から読み下していくために「こと」と読まざるを得ないわけである。「里」は時代によって異なるが、この時代は約四四〇メートル。

3 跳 とびあがる。はねあがる。「おどル」の他に「とブ」「はねル」の訓もある。

4 便即 「便」「即」とも「すなはチ」と読み、「すぐに・そのまま」などの意。「便即」は、同じ意味の語を重ねる構造の熟語（連文）。

キー・ポイント **「命黜二其人一」使役形**

「黜」は、官位を下げる。職をやめさせる。熟して「黜免」ともいう。ある動作、ここでは「命」の結果として次の動作「黜」が使役になる例。したがって「黜」と読む。

舟已過万重山」の句（「早発二白帝城一」）があり、「世説新語」のこの条の劉孝標注にも漁師の歌として「巴東の三峡、巫峡長し、猿鳴くこと三声、涙裳を沾す」が紹介されている。

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「聞レ之怒、命(ジテ)斲(ケシム)二其人一。」（一三〇・5）とあるが、桓公がこのようにした理由を、説明してみよう。**

【答】 いかに動物とはいえ、猿の子を捕まえ、その母猿を死に追いやった部下が許せなかったから。

▼ポイント▲ 部下の行為が、母の子に対する愛情を無視した行為であることに注意する。母猿の息が絶えたというところで終わらずに、桓公が部下を免職したという話が続いているところにこの故事の一つのポイントがあろう。「解説」参照。

言葉と表現の解答例

1 **「断腸」という言葉は、現在どのような意味で用いられているか、辞書で調べてみよう。**

【答】 はらわたがちぎれるほどの思い。非常な悲しみのたとえ。

▼ポイント▲ 新聞の見出しに用いられることも多い故事成語だが、生徒にはなかなか馴染みがないかもしれない。辞書で意味を調べた後、漢文の窓②『三国志』を読んで意味を確認するとよいだろう。あるいは『三国志』に見える「断腸」の意味を、前後の文脈から推測させる、という方法を取ることも可能である。

2 **次の語句は、それぞれどのような故事から成ったものか、辞書で調べてみよう。**

(1) **助長**　(2) **推敲**(すいこう)　(3) **完璧**　(4) **矛盾**

【答】 (1) 苗の生長をはやめようとした宋の人が、苗を引き抜いて駄目にしてしまったという故事。（『孟子』）

(2) 詩人の賈島が「僧は推す月下の門」という句を作っていたが、「推す」を「敲く」にすべきか迷っているうちに、韓愈の行列に突き当たってしまった故事。（『唐詩紀事』）

(3) 秦王に奪われそうになった和氏の璧という宝石を、藺相如が機転を利かせて無事に持ち帰った故事。（『史記』）

(4) どんなものでも突き通す矛と、どんなものでも突き通せない盾を売る商人に、二つをぶつけたらどうなるのかと客が聞いたところ、答えられなかった、という故事。（『韓非子』）

▼ポイント▲ 現在通用している意味はそれぞれ次のとおり。(1)助けようとして逆にだめにしてしまうこと。(2)詩や文章を作る際、字句や表現を何度も練り直すこと。(3)物事に全く欠点のないこと。(4)前後のつじつまが合わないこと。また整合・両立しないこと。

もとの故事と現在通用している意味にずれがあることに注意する。

言語活動の解答例

1 「断腸の思い」という表現を用いて小話を作ってみよう。

【答】　苦楽を共にしてきた友達と別れ、いよいよ外国へと旅立つ。次に会えるのは一体いつの日だろう。僕は断腸の思いで教室を後にした。

▼**ポイント▲**　一文で「断腸」の思いを感じている状況を伝えることは、なかなか難しいと考え、小話を作るという活動とした。「言葉と表現」1で現在用いられている「断腸」の意味を確認し、それを踏まえて活動を行う。それぞれの小話ができあがった後、数名でグループを作り、その中で互いの作品を読み合い、「断腸の思い」という表現が効果的に用いられているかを確認する。その場合、苦痛や悲痛を感じるポイントは必ずしも他人とは一致しない、ということには言及しておきたい。また、単に「悲しい・苦しい」と表現する場合と、「断腸の思い」と表現する場合とで、どのようなニュアンスの違いがでるか、ということにまで議論が及ぶと、より理解が深まるだろう。

（宮　利政）

漢文の窓②

現在も使われる故事成語

教材のねらい

我々の身の周りにも故事成語は使われているが、それとは気づかないことも多い。新聞やネットニュースの見出し、小説や評論、はたまたSNSなどその場面は多岐にわたる。ここでは随想・小説・新聞記事に使われた故事成語を紹介し、「故事成語」の単元を通じて学習したものが実際にどのような場面で使われているのか、という視点を育てることを目指したい。

作者

北大路魯山人　明治十六（一八八三）年～昭和三十四（一九五九）年。京都府の生まれ。本名は房次郎。芸術家、陶芸家など様々な顔を持つ。料理研究のかたわら食器制作に取り組んだ。会員制の料亭「星岡茶寮」を営むなど、食に関する探究心が強く、著述も多い。

吉川英治　明治二十五（一八九二）年～昭和三十七（一九六二）年。神奈川県の生まれ。小説家。大衆文学の第一人者であり、国民作家と呼ぶにふさわしい作品を数多く執筆した。代表作は『新書太閤記』『新・平家物語』『私本太平記』など。

出典

お米の話　食全般に造詣の深い筆者が自らの体験をもとに、お米と料理との取り合わせや、「ご飯を炊く」行為も立派な料理であることを綴った随筆。本文は五月書房『新装愛蔵版　魯山人著作集　第三巻　料理論集』一九九七（平成九）年によった。

三国志　戦時中に新聞小説として連載された作品。中国元代末期に書かれた『三国志演義』を元に、吉川が日本人向けにアレンジを加えて大衆文学へとしたてあげ、人気を博した。引用部分は徐庶が老母の身を案じて許都へと帰るため、信頼してお仕えしてきた劉備に別れを告げた場面。本文は講談社『吉川英治歴史時代文庫36　三国志』（四）一九八九（平成元）年によった。

日本経済新聞　十五面「大機小機　朝三暮四の経済政策」令和元（二〇一九）年七月十三日によった。

参考

「お米の話」

近頃は以前のように、やれ播州の米がうまいとか、越後米にかぎるとかいうような話はあまり聞かない。ただ米でありさえすればあり難がるご時世ではあるが、しかし以前でも、米の味に詳しいというひとは少なかった。

うまい米といえば、その昔、朝鮮で李王さまにあげるために作っていた米がある。これはすこぶるうまかった。収穫は非常に少ないが、米粒の形もよく、見たところもきれいな米であった。た

だし、あまりうますぎて、副食物がご馳走の目的の場合には使えない。うますぎるというと変に聞こえるかも知れないが、元来米というものはうまいものである。うまいものの極致は米なのである。うまいからこそ毎日食べていられるわけなのである。特にうまい米は、もうそれだけで充分で、ほかになにもいらなくなってしまう。殊にライスカレーなんてものに使う米は、少しまずい米でないといけない。たとえば玄米だ。

玄米は白米とは別な意味で非常にうまい。玄米のごはんにご馳走をつけて出すのは蛇足である。漬けものでもあれば充分である。だから、いくらうまいといっても、料理の後では邪魔になる。

ところが、一般の家庭はもちろんのこと、多数の料理屋がこのごはんというものについて、とても注意が足りない。

料理屋がそうだから、料理人はみなそうである。料理長というものは板前といって、俎板の前に座って刺身ばかり作っている。本当の料理人ならば、仮に自分で飯を炊かなくとも、飯がうまく炊けたかどうかということについて、相当気になるはずである。なぜなら、せっかくいい料理を作っても締めくくりに出る飯がだめだったら、すべてがぶちこわしになってしまうからである。

ところが、料理屋というものの多くは、酒飲み本位に工夫されているために、たいていの料理人は自分の受け持ちの料理さえ出してしまうと、後の飯がどうであろうと、一切お構いなしで帰ってしまう。それでは料理人としての資格はゼロに等しいといわれても、彼らは一向に頓着しない。理想がないからだ。

一般に飯炊きというと、料理人ではなく、雑用人として、一段と下った仕事として扱い、ろくな給料も出していないが、ずいぶん間違った話である。

だから、星岡茶寮時代、わたしのところへ料理人が来ると、君は飯が炊けるかと第一に聞いてみる。なかなか自信をもって、答のできる者はいなかった。

とにかく、飯は最後のとどめを刺すものであり、下戸（げこ）には大事な料理である。料理をするほどの者が、自信をもって飯が炊けないということは、無茶苦茶な振舞いであり、親切者とはいえないことになる。

それにもかかわらず、料理人は自分の苦労の足りなさを棚に上げて、飯を炊くということは、なにか自分の沽券にかかわるもののごとく考えているらしい。浅ましい話だが、それでは先生はごはんをお炊きになりますか、と聞くものがあった。わたしは言下に炊けると答えた。

料理人は飯なんてものは、無意識のうちに料理ではないと考えているらしい。ところが、飯は料理のいちばん大切なものなのである。料理ではないと思うところに根本的に間違いがあり、まずい飯ができるのである。

洋食でパンの良否を問題にしたり、焼き方を問題にしたりするのとまったく同じなのである。だから、飯は料理ではないという考えを改め、立派な料理だと考えなければならない。

この意味で、料理人は飯の炊き方に注意しなければならない。わたしは断言する。飯の炊けない料理人は一流の料理人ではない。主婦、女中、飯炊きについても、同じことがいえるのである。

（五月書房『新装愛蔵版　魯山人著作集　第三巻　料理論集』一九九七〔平成九〕年）

大機小機

朝三暮四の経済政策

先日、経済産業研究所のセミナーで「日本経済低成長からの脱却」という話を聞いた。興味深かったのは最近話題の現代貨幣理論（ＭＭＴ）と、一昨年話題になったシムズ理論（ＦＴＰＬ）の話だ。

２つの理論は正反対のことを言っている。ＭＭＴ理論では、財政をもっと出してもインフレにならないから景気のために財政出動すべきだという。シムズ理論では、財政をもっと出せばインフレになるからデフレ脱却のために財政出動すべきだという。

財政出動すべきだというのは同じだが、かたやインフレにならないからといい、かたやインフレになるという。それがまかり通るのは、どちらも「理論（Ｔｈｅｏｒｙ）」と言っているが、実は「モデル」で、前提の置き方でいずれの結論にもなるからだという。

講師が「モデル」の例として挙げたのは、マルクス主義経済学。価値を生み出すのは労働だけだという前提を置けば、資本家の取り分は労働者からの搾取になる。そこで、その不正義を改める革命が必要になるのだという。

そのように「モデル」は融通むげだが、ケインズ経済学の「理論」の中にある限り、経済成長は導き出せないという。ケインズ経済学は景気回復の「理論」で経済成長の「理論」ではないからだ。経済成長のためにどうすればいいのか聞かれたケインズは、アニマルスピリット（起業家精神）と答えたのだそうだ。

要は財政出動をすれば一時的に景気は良くなるが、成長にはつながらないということ。不況でもないのにそんなことをしても、財政出動の効果がなくなれば、景気は元に戻って成長率も元のままというわけだ。ＭＭＴ理論の最大の実践国が日本だと言われることがあるが、日本の経済成長率は低迷し、かつて世界の２～３位だった１人当たり国内総生産（ＧＤＰ）が、今や経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）諸国で最低水準の26位というのがその証拠だという。

講師によれば、財政出動で経済成長をというのは朝三暮四の経済政策だ。猿に、トチの実を朝３つ夕方４つと言ったら騒ぎになった。そこで、朝４つ夕方３つと言ったらみんな喜んだというのと同じというわけだ。本当の成長戦略を行えば、経済成長率はもっと上がり、みんな豊かになるはずだというのがご託宣であった。

（唯識）

（『日本経済新聞』15 面　令和元（2019）年 7 月 13 日）

（宮　利政）

単元の言語活動2　故事成語を「五・七・五」で表現する

活動のねらい

本単元では二つの言語活動を配置した。単元の言語活動1では初学の段階であることを踏まえ、グループを作り、グループのメンバーと交流をしながら楽しんで取り組める活動を配置した。一方、本活動はそれを受けて、学んだことを個人で深め、深めたものをアウトプットし、たがいに評価し合う活動となることをねらいとした。

「故事成語」の学習では、ある程度まとまった量の漢文に触れ、訓点に従って読む、という技術的習熟がメインとなるだろうが、故事成語は長い歴史の中で蓄積された英知であり、我々の言語活動を豊かにできる言葉でもある。単元では学ぶことのなかった故事成語も含めて自ら検索し、その意味と由来を調べる力と、さらには調べた内容を「五・七・五」という定型文にまとめ、発表する力は、どちらも今後生徒たちに求められる国語力である。

図書室を使用したり、様々なデバイスを活用したりして、楽しみながら実践していただけると幸いである。

タイトル・序文の解説

我々は普段、「故事成語」とひとくくりにして使用することが多いが、元々は「故事」と「成語」とが組み合わさったものであることを確認しておきたい。我々が「故事成語」と表現するものは、中国では「成語」とのみ言われており、漢和辞典にも「昔からよく知られよく使われることば。」（角川書店『新字源』）、「ことわざ。故事成語。成句。」（三省堂『漢辞海』）と説明されている。一方、「故事」については、「①むかしあった事がら。②後世のしきたりのもとになったむかしの事がら。③（国）後世のことばの起源になっているむかしの事がらや物語。」（角川書店『新字源』）、「①昔あった事柄。②先例。しきたり。③後世のいわれや、ことばの起源となった昔の事柄。」（三省堂『漢辞海』）とあり、どうやら③の意味で用いられているらしいことが見て取れる。

「課題」の解説

課題　**故事成語を一つ選び、意味と由来を調べ、「五・七・五」にして発表し、互いの作品を鑑賞し合おう。**

本活動では、まず、我々が普段用いている「故事成語」のもとになった話までさかのぼり、どのような経緯で「成語」としての意味を持つようになったのかを自ら探究してもらいたい。探究した内容を端的に表現する方法としては、「五・七・五」という表現形式を採用した。あまり長くしてしまうと、クラス全員のアウ

トプットを共有することが難しいため、初学の段階であることを考慮して、できれば全員のアウトプットを可視化し、鑑賞することができるように、という考えからである。

活動の解説

1 故事成語を一つ選び、意味と由来を調べよう。

①漢和辞典や故事成語辞典、資料集を参照し、故事成語を一つ選ぶ。［知技(2)ア・エ］

本単元には三つの話が掲載されており、授業で扱い切れない話もあると思われる。その場合は教科書に掲載されている故事成語を選択してもよいだろう。また、辞典や資料集から と提示してはいるが、学校の図書室には他にも様々な工具書があると思われる。司書教諭と協力をし、故事成語を検索するのに便利なものがあれば、あらかじめ準備して教室に用意しておくのもよいだろう。無論図書室を利用して授業をすすめてもよい。近年はＩＣＴ教育の環境も整備されつつあるので、インターネットを通じて故事成語を検索させる、という方法もあるだろう。あるいは時間の関係で、故事成語の一覧をあらかじめ教員が作成し、その中から選択させる、ということでもよいだろう。生徒の置かれた状況や時間数に応じて柔軟にご対応いただきたい。

【評価】・漢文由来の故事成語を調べることを通して、我が国の文化と中国の文化との関係について理解しているか、確認する。

・現代でも使われる故事成語と漢文のつながりについて理解しているか、発言や行動などにより確認する。

②意味・もととなった話（エピソード）を辞典やインターネット、資料集で調べる。［知技(2)ウ］

①の活動とも関連してくるが、インターネットで故事成語を探す場合、漢文由来ではない故事成語を見つけてくる生徒もいる。多くはことわざと勘違いをしている場合が多く、もとの話を見つけようにも見つからない状況になってしまうことが多いので注意を促したい。

資料集にはもととなった話とセットで故事成語が紹介されているものも多いので、生徒が活用するのにも大変便利である。活用をお勧めしたい。

【評価】故事成語の意味・もととなった話（エピソード）を調べることを通して、訓読のきまりなどについて理解しているか、確認する。

2 「五・七・五」を作ろう。

①もととなった話の特徴的な点を見つける。

もととなる話にも長短あるだろうが、まずは現代語訳でかまわないので、もととなった話を読み込ませ、一読して生徒自身の目を引いた箇所や、エピソードの特徴的な点などを挙げさせるとよいだろう。教科書の未習部分の故事成語を用いる場合には、資料集やインターネットで現代語訳を検索させるとよい。

ただ、すべての故事に特徴的な点があるわけでもないので、

気になる箇所を無理に探させなくともよいだろう。

②意味・状況・由来が伝わる「五・七・五」を心がける。 知技 (1)ウ

例「朝三暮四」猿たちは　暮れの四つに　目が行かず
「呉越同舟」君と僕　呉越同舟　試験前
「五十歩百歩」チョコ一個　君は母から　僕は義理

ここでは、教科書に挙げた具体例を元に説明をする。この具体例は実際に生徒が作成してくれたものを紹介させていただいた。

「朝三暮四」は「愚者が人のことばの内容をよく考えないこと。また、人がことばたくみに他をあざむくたとえ。むかし、狙公（さる飼い）が、えさを朝に三つ、暮れに四つやると言うとさるがいかり、朝に四つ、暮れに三つやると言うとさるが喜んだという話による。」（角川書店『新字源』）とある。この話の「朝に三つ、暮れに四つ」という部分で怒ったさるたちには、暮れの四つが見えていなかった、という状況を「五・七・五」にまとめたものが「猿たちは　暮れの四つに　目が行かず」である。「人のことばの内容をよく考えない」ということも表現されており、「朝三暮四」のエピソードの特徴的な箇所も伝わる作品となっている。

「呉越同舟」は「かたきどうしがいっしょにいるたとえ。」（角川書店『新字源』）、「仲の悪い者どうしがいっしょにいること。」（三省堂『漢辞海』）とある。仲の悪い者同士が一緒にいる状況を、普段仲が悪くて一緒にいることのない二人が、勉強にひときわ熱心に取り組まなければいけない試験前という状況で一緒にいる、さらには協力までしている状況を「五・七・五」でまとめたものが「君と僕　呉越同舟　試験前」である。故事成語を「五・七・五」にする、という課題で故事成語そのものを用いることにご意見もあろうが、意味を汲んでうまく活かしてあるので、一例としてご紹介した。

「五十歩百歩」は「戦争で五〇歩にげた者と百歩にげた者とはにげた距離は異なるが、にげたことは同じ。少しだけの違いで大局は同じ。」（角川書店『新字源』）、「戦場で五十歩逃げた者と百歩逃げた者の間に大きな違いはなく、逃げたという点では同じである。似たり寄ったりの状況を学生がおかれた状況にあてはめて「五・七・五」で表現したものが「チョコ一個　君は母から　僕は義理」である。年頃の男子にとってはバレンタインというイベントでチョコレートがもらえるかどうかは気になるところだが、母からもらった「君」と、義理でもらった「僕」とは大差がない、という悲哀をうまく「五・七・五」にまとめてある。

【評価】故事成語を「五・七・五」で表現することで、我が国の言語文化に特徴的な語句について、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

3 調べたことをまとめよう。

選んだ故事成語とその意味、もととなったエピソード、2で作成した「五・七・五」を紙一枚にまとめる。 知技 (1)ア

例

「蛇足」　参考文献　資料集

意味　無駄な行為。あっても益のないもの。

由来　もらった酒を飲むのに、蛇を早く描いた者がそれを飲むことになったが、一番に描き上げた者が、蛇に足を描き足したため、酒を飲み損ねたという話に基づく。

出典　劉向『戦国策』

「足一本足して失うよき一杯」

成果を紙一枚にまとめる、としたのは交換して互いの成果を読み合う活動を実施しやすくするためである。互いの成果を読み合うことで自分が調べた以外の故事成語とその意味や由来に触れることができるため、故事成語自体への理解を深めることも可能となるだろう。また、クラスメイトが作成した「五・七・五」は、教員から与えられる情報とは異なり、一人一人の試行錯誤の結果として溢れる魅力を持つと考える。初学の段階で互いをよく知らない者同士が、互いの人となりを知るのにも役立つであろう。

本活動では紙一枚にまとめるとしたが、情報共有の仕方は他にも考えられる。ネット環境が整っていれば、ネット上で共有することも可能であろうし、逆に故事成語と作成した「五・七・五」を全員に板書させ、品評会のような形をとることも可能であろう。状況に応じて柔軟にご対応いただきたい。

4 グループを作り、相互評価を行おう。

3 でまとめた紙を互いに読み合い、評価をする。 思判表B(1)オ

主態

一グループの人数は四人から五人くらいが適当と思われるが、参加人数によってご判断いただきたい。グループのメンバー同士で互いのまとめを読み、「五・七・五」を鑑賞し合うとともに、自分が一番よいと思った作品を挙げ、よいと思った理由やよいと思った点を伝え合う。時間が許せば以下の方法を追加してもよいだろう。

生徒の作成した「五・七・五」にグループのメンバーから改善点をコメントさせ、本人に戻し、改めて推敲した「五・七・五」を再度共有する、という方法である。なかなかそこまで時間を割くことは難しいだろうが、可能であればお試しいただきたい。

【評価】・故事成語をもとにした「五・七・五」の相互評価を行い自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えを持とうとしているか、確認する。
・故事成語を「五・七・五」で表現することで、現代でも使われる故事成語と漢文のつながりを理解し、我が国の言語文化について自分の考えを持とうとしているか、行動を点検したり、言語活動WSの記述を確認したり、振り返りシートの記述を分析したりする。

（宮　利政）